

# 東京バッハ合唱団 月報

[第706号] 2021年4月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101  
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604  
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.706

April 2021

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## バッハ・カンタータの場景

——作曲アイデアの素材から見渡してみる——

大村 健二 (団員)

前号月報で「楽譜出版の今後、カンタータまるごとの紹介に注力」(大村恵美子)という方針に転換したことを報告しました。あわせてご一読ください(東京バッハ合唱団のHPから「月報」→「バックナンバー」で検索)。

[http://bachchor-tokyo.jp/monthly\\_newsletter/index.htm](http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm)

まずは“在庫のセール”を兼ねて、われわれが刊行した楽譜のある全81作品(内2曲は世俗カンタータ)をとり上げ、それが済んだら未刊の作品群の紹介に進んでいく、という「かなり遠大な計画」になります。ご存じのように全部で200曲近くあるのですから。これとは別に、今後の公演計画に沿って、新規の楽譜出版はつづきます。何点ふえることになるのか、これまた悠遠……。

この紹介作業は、余命のいくらか多そうな(?)小生が引き受けることにしました。資料の蓄えとしては、バッハの教会カンタータ作品の便覧を準備しつつありましたので、これに手を加えながら進めていこうと思います。

「アリア集」から解放されたのを幸い、1作品中の全ての楽曲を、作曲アイデアの素材(教会暦の主題とその聖句、物語の場面展開、コーラルのこと、作曲時期固有の課題などなど、表現の動機として思いつくもの)の周辺から見渡してみた上で、興味のおもむくままに細部に着眼してみる、といった手法でスタートしてみます。とすると、主題聖句の案内から始めるのが順当なので、新バッハ全集の分類原理と同様、おのずから教会暦でまとめてみることになるでしょう。

### 1. 復活節の場景 (1)

- ・BWV 4 《キリスト 死につながれしが》 復活節第1祝日
- ・BWV 6 《とどまれ我らと 夕闇せまり》 復活節第2祝日
- ・BWV 42 《同じ安息日の夕べ》 復活節後第1日曜日
- ・BWV 67 《留めよ 心にイエスを》 同上
- ・BWV 104 《牧人 主よ きけよ》 復活節後第2日曜日
- ・BWV 166 《いずこへ 主よ行きたもう》 復活節後第4日曜日

#### 月報 2021年4月号 CONTENTS

- ・バッハ・カンタータの場景 (大村健二) …p. 1-3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [2] (大野博人) …p. 4

### <定期演奏会、延期のお知らせ>

6月5日開催予定の第120回定期演奏会(川口リリア音楽ホール)を、残念ながら延期します。

東京のコロナ感染状況は収まる気配がなく、合唱団としては、年明け(1月7日)の緊急事態宣言発出以来、一度も練習が出来ないままで今日を迎えています。宣言解除の時期も二転三転、解除後の施策もはっきり示されず、練習再開の予定が立ちません[後に、3/27再開した]。

団員の方々のご自宅での独習に工夫と努力を重ねていますが、「合唱」練習は1人ではできませんので、仕上げには明らかに時間不足となってしまいました。

実施3か月前、諸準備のギリギリの期限が迫り、去る3月6日、臨時の団員相談会を対面で行い、さまざまな課題を論じ合いましたが、練習不足と入場者数制限等の制約に加え、感染不安もぬぐえず、当初の日程どおりの実施は見送らざるを得ない、という結論に至った次第です。

当プログラムは、昨夏以来の2度目の延期になってしまいました。ご出演予定の独唱者・演奏者のみなさま、ご来聴を楽しみにお待ちいただいたファンの方々のみなさまには、こころよりお詫びを申し上げ、ご寛恕を賜りたいと存じます。

同内容の公演は、事態の安定を見計らいつつ、必ず近いうちに実現させる心づもりでおります。今後ともくれぐれも宜しくお願い申し上げます。

3月20日、東京バッハ合唱団

というわけで、4月号は時節柄、復活節(今年は4月4日)とその後の主日の作品を集めてみました。上掲のとおり、既刊楽譜のなかからは6曲が該当しますが、それぞれの教会暦が、たまたま暦(こよみ)の順に並びました。スペースの都合で、そのうちの2曲を先ずとりあげ、次号につづく、とします。

バッハ時代のライプツィヒの教会暦では、復活節(イースター)は、降誕節(クリスマス)、聖霊降臨節(ペンテコステ)とともに三大祝日と呼ばれ、日曜日を第1祝日として、月曜(第2祝日)、火曜(第3祝日)と3日間にわたって祝われます。週が明けると「復活節後第1日曜日」であり、キリストの復活から40日目にあたる昇天祭まで、5~6週の日曜日を数えて、つぎの大祝日、聖霊降臨節へと至ります。

この間の日曜と祝日の礼拝の中で読み上げられる聖

書（新約）の箇所は、教会暦ごとに決まっています。「使徒書簡（Epistel）」（パウロら使徒たちの書簡、旧約イザヤ書も加わる）と、「福音書（Evangelium）」（4福音書）の2つがあって、教会付きカンタータ作曲家は、当日の説教を担当する牧師と、その日の聖句に関連する重点テーマなどについて打ち合わせたはず。この2か所での聖書朗読のあとに、カンタータ演奏と説教がありました。説教とカンタータとが、聖書の説き明かし、という位置づけです。

この打ち合わせの場から、まずはバッハの作曲“意欲”が燃え始めるだろうことが想像されます。その意欲に濃淡があり、主題によって色合いが異なり、別の要因（多忙か暇か、使える既製作品の有無、新様式への興味、時々の歌手や奏者の技量、他……）の影響もあって、われわれが今日、鑑賞したり、演奏したりする多様な作品として結果したということなのでしょう。

この時期の教会暦と指定聖句は以下のとおりです。

教会暦	使徒書簡	福音書
復活節 第1 祝日（日）	I コリント 5, 6-8	マルコ 16, 1-8
第2 祝日（月）	使徒言行 10, 34-43	ルカ 24, 13-35
第3 祝日（火）	使徒言行 3, 26-33	ルカ 24, 36-47
復活節後 第1 日曜日	I ヨハネ 5, 4-10	ヨハネ 20, 19-31
第2 日曜日	I ペトロ 2, 21-25	ヨハネ 10, 12-16
第3 日曜日	I ペトロ 2, 11-20	ヨハネ 16, 16-23
第4 日曜日	ヤコブ 1, 17-21	ヨハネ 16, 5-15
第5 日曜日	ヤコブ 1, 22-27	ヨハネ 16, 23-30
第6 日曜日	I ペトロ 4, 8-11	ヨハネ 15, 26-16, 4

（前掲6曲に関わる教会暦を、**アミ**掛けで表記）

各聖句をここに引用しながら進めていければ簡単なのですが、今回とりあげる予定の2曲分（BWV 4＝第1 祝日、BWV 6＝第2 祝日）だけでもページが埋まってしまう。内容のヒントになる章句見出しを、ノイマンのバッハ歌詞集を参考にして掲げましたが、やはり現物の聖書の箇所に直接あたっていただくことをお勧めします。

さらに、われわれは、母語である日本語訳詞での上演を原則としていますので、歌詞の表示は必須です。これもスペースの制約で、別の箇所（サイト）へのリンクという形で解決させていただきました。

各曲の紹介は、まず、教会暦と聖書の指定箇所、成立の時期、歌詞台本の作者や内容、声部と器楽編成、楽曲構成と各歌詞冒頭句、などの基本データを掲載しました。その上で、われわれの上演歴、出版譜の発行時期、録音の有無等も添えさせていただきます。当合唱団の60年の歩みをとおして、くり返し上演し、あるいは初めて向かい合った、いずれも名曲ばかりでした。

これから取りあげる既刊分の80曲ほどについては、すべて上演経験のあるものであり、また、すべての楽譜制作の当事者として関わってきた作品ですが、あくまでも一団員、一愛好者として楽しんできたものであって、叙述の内容に関しては、主観的な印象の域を出るものではないことを、予めお許しいただきます。

## ■カンタータ第4番《キリスト 死につなわれしが》

Christ lag in Todes Banden BWV 4

【教会暦】復活節第1 祝日用（他に BWV 31、BWV 249）  
 【使徒書簡】第1 コリント 5, 6-8（キリスト、われらの過越しの小羊）  
 【福音書】マルコ 16, 1-8（キリストの復活）  
 【成立】1708年またはそれ以前、ミュールハウゼン/アルンシュタット（1713年説もあり、ヴァイマル）。ライプツィヒ再演 1724/1725年。  
 【歌詞】全節コラールカンタータ。ルターのコラール Christ lag in Todes Banden（1524）全7節、BCH-18（大村共著『バッハ コラール・ハンドブック』でのコラール番号【18】、以下同様）。  
 【上演用訳詞】大村恵美子 <http://bachsmusik.starfree.jp/bwv004.htm>  
 【編成】SATB、合唱、ツィンク（コルネット）(zi)、トロンボーン(tb)3、弦合奏(str) (Va2)、通奏低音(bc)

【楽曲構成】	訳詞冒頭句/原詞冒頭句	編成（略語）
1 シンフォニア	—	str、bc
2 合唱 （コラール第1節）	キリストわが罪のため Christ lag in Todes Banden	zi、tb3、str、bc
3 二重唱（SA） （コラール第2節）	死を徒（したご）うる者 Den Tod niemand zwingen kunnt	zi、tb、bc
4 アリア（T） （コラール第3節）	イエス・キリスト出でて Jesus Christus, Gottes Sohn	vn、bc
5 合唱（または重唱） （コラール第4節）	奇しき戦（いくさ）あり Es war ein wunderlicher Krieg	(SATB)、bc
6 アリア（B） （コラール第5節）	これぞまことの過越しの糧（かて） Hier ist das rechte Osterlamm	str、bc
7 二重唱（ST） （コラール第6節）	祝えいざわれら So feiern wir das hohe Fest	bc
8 コラール（合） （コラール第7節）	まことの過越しの Wir essen und leben wohl	zi、tb3、str、bc

【上演履歴】1972（#25＝第25回定期演奏会の略、以下同様）、1980（#47）、1983（#53/I 独＝第1回ドイツ演奏旅行の略）、2010（#104）、2018（目白聖公会 100周年）

【楽譜発行】2000年、ISBN978-4-925234-04-7（¥1900）

【録音】CD「50曲選」Vol.1（1983年録音、#53）

「復活節の場景」で真っ先に思い浮かぶのは、週の初めの日の朝の、イエスの墓の前でのマリヤらの驚きの表情でしょう。葬ったはずの遺体が消えていて、かわりに白い衣を着た若者が座っていた（上掲福音書）。しかし、この曲 BWV 4 では、使徒書簡のほうの聖句「あなたがたはパン種の入っていない者なのです。キリストが、私たちの過越しの小羊として屠られたからです」（上掲箇所、聖書協会共同訳）に注目します。

若いバッハに、初めての復活祭用カンタータを作曲する機会がめぐってきたとき、彼は迷うことなくルターのコラール Christ lag in Todes Banden の取り込みを思いついたことでしょう。バッハが、故郷アイゼナハにゆかりの改革者のこのコラールに特別な愛着を持っていたことは当然で、第1曲シンフォニアを主題旋律の断片から書き起こし、第8曲の単純な4声体合唱に至りつくまで、全曲を、このコラールの旋律と歌詞から



■キバナセツブンソウ（黄花節分草）  
【撮影：千葉光雄】

離れることなく完結させました。残された200曲ほどのカンタータ中に、こんな例は見出せません。

この印象深い旋律には、ルターからバッハに至る200年の前にも、カトリック教会の数百年の歴史があります。中世以来の復活祭のミサのなかで、聖歌「過越しの犠牲を讃美せよ (Victimae paschali laudes)」(譜例)として歌い継がれていたものを、ルターは、その旋律と歌詞を敷衍してドイツ語のコラールに改作したのでした(1524年)。



## 便利と不便

大野 博人 (安曇野閑人)

退屈な人生の時間はゆっくりと流れなければならぬ。時間がなかなか進まないと感じてこそ退屈できる。

薪ストーブは、冬にそれを演出するのにうってつけだ。

静かに揺れる炎を眺めながら、延々と続くバッハのゴールドベルク変奏曲に身をゆだねる。眠っているような覚めているようなあいまいな時間が続く……。至福の退屈。

けれども、そこに至るには根気と体力がいる。

もとより薪ストーブの燃料は薪だ。拙宅は雑木林だったところに建てた。そこに生えていた松の木を床や梁に使った。それでもたくさん残った丸太が薪になった。

まず、業者に頼んで長い丸太を 40 センチくらいの長さ（これを「玉切り」という）に切ってもらった。だが、そのままでは太すぎるので、幅 10 センチ程度の太さに割らないといけない。そこからは自分たちでやる。といっても山のように積み上がった玉切り丸太を一つ一つ斧で割っていきはきりがない。ガソリンで動く薪割り機を借りた。機械だから斧よりははずっとはかどるけれど、玉切り丸太一つで 10 キロくらいの重さがある。それを何百個も薪割り機に乗せては下ろす作業を繰り返す。最初は腰をいためた。

自前の丸太は、4 回の冬を過ごせるくらいの量があった。それがなくなってからは、地元の業者から買った。配送も頼めるが、安く買うには貯蔵場に向いて自分で軽トラックなどに積み込む手間が必要だ。調達したら庭の薪棚に詰め込む。ここでも体力勝負。

木々が色づき始めるころ、薪の出番になる。まず薪棚から家の中に運び込む。一夏乾かしてもやっぱり重い。そしていよいよ着火だが、マッチ 1 本ですぐに燃え始めるわけではない。まずストーブの炉内に枯れた小枝、松葉や松ぼっくり（これらは、庭のそこら中に大量に落ちているのでタダ）を入れて焚きつけにする。炎が上がったら薪を置く。

でも、薪は冷えている。すぐには火が移らない。松葉を足したり、空気を送り込んだり。うまくしないと炎が消えて下火になってしまう。

なんとか火がついても炉の温度調整などで目が離せない。うかうかしていると、温度が上がりきらないうちに薪が燃え尽きる。静かにゆらゆらと燃える炎を眺めるのは、容易ではない。

考えてみると、薪ストーブはかなり不便である。これがエアコンなら、リモコンの暖房ボタンをポチッとやるだけ。



会社勤めをやめて雑木林の中に住むと言ったとき、多くの友人が「都会とちがって、ずいぶん不便になるぞ」と心配してくれた。が、私はひるまなかつた。「便利さはそれほど惜しむべきことなのか、便利なだけの人生など糞食らえだ」。薪ストーブは、「便利さだけが人生の価値ではない」を感じさせてくれるはずだ。

だから、今日も今日とて重い薪を運び、焚きつけに取りかかる。だが今朝は、着火がどうもうまくいかない。こんな場合は、炉内に空気を送り込まなければならない。

使い始めたころは、自分でふーふーやってたが、すぐに息が上がってしまった。うちわを使ったら中の灰が炉外にまで巻き上がった。本格的なふいごは高価なので、おもちゃのふいごを試したが、さすがにすぐに壊れた。試行錯誤を繰り返していると、妻が 100 円ショップで自転車用の簡単な空気入れを見つけてきた。

手でポンプを押して空気を送り込む。するとすぐに薪が炎をまとう。私は感嘆の声を上げた。

「おお、なんと便利な！ すばらしい！」

すかさず、心の声が聞こえる。

（ん？ オレ、今なんて言った？ 「便利」がすばらしい？）

薪ストーブを扱っている店が販売促進のために開いた「調理教室」の場面を思い出す。十数人の客にまじってストーブをオープンとして使ったピザの焼き方を教わった。炉内の温度や炎の状態はどうすればいいか。焼きはじめのタイミングはどうか……。

「失敗しないためのコツは、何ですか」という質問への先生の答えは含蓄が深かった。

「失敗したくない場合は、ご自宅のオープントースターをお使いください」

「便利」に見切りをつけて「不便」を友とするはずが、つい「便利」を求める。退屈な人生にたどり着くまでの道は、まだまだ長く険しい。

◆筆者は、当合唱団の長年の後援会員・団友。元朝日新聞記者、ヨーロッパ総局長など、おもに外報畑で超多忙な要職を歴任され、昨年退職して信州に移住した。これを機に、随時、山中の暮らしのあれこれなど、ご自由にご寄稿いただくこととした。写真提供も。